



廃食油を回収・再利用したBDF (バイオディーゼル燃料)で走る「天ぶらバス」に乗って行く「エココンシャスな旅」は都心のOLの参加も多い 写真提供/リボン



本田 圭吾

桑沢デザイン研究所
プロダクトデザイン分野
専任教員

1996年に東京造形大学を卒業し、アウトドア用品メーカー企画開発部に勤務の後、2004年から現職。同年、プロダクトデザインサービスhonda keigo+design設立。サステナブルデザインに関する活動を基点にデザイン教育に携わる。グッドデザイン賞など受賞多数

経験の「所有」から「共有」へ

「観光旅行」は交通機関の発達とともにパック旅行が主流となり、ファッション産業や外食産業よりもずっと早くファスト化していた。「マストゥリズム」と呼ばれる観光旅行は地域の資源を利用し文化を変容させ、「観光地」という一種のテーマパーク化を進行させた。地域資源を一方的に消費し、観光旅行はコモディティ（汎用品）化したと言われる。従来型のマストゥリズムに変わり、近年拡大しているのが参加・体験型の観光旅行だろう。地域の文化や人々との交流を楽しむスローな観光旅行といえまいだろうか。自然環境とその地域の文化や風習の持続可能性にも配慮する「エコトゥリズム」もその一つである。

環境に配慮した地域密着型の観光旅行を提供するリボン（東京都新宿区）の「エコトゥリズム・ネットワーク」では、21世紀の循環型社会に対応する観光旅行のあり方

を体験・啓蒙するため、環境負荷の低い独自のエコトゥリズムを実践している。

都市近郊から出発するバス旅行のすべてに、家庭から出る廃食油を回収・再利用した燃料で走る観光バス、通称「天ぶらバス」を採用しているのだ。昨年4月にはこの天ぶらバスで、東日本大震災の被災地である宮城県南三陸町に多くのボランティアが赴いた。一時避難所となった学校に憩いの時間を提供する臨時的「ライフカフェ」をオープンするこのボランティア旅行に筆者も参加した。

観光旅行の価値は、行った観たという経験の所有から、SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）などによる経験の共有へ移行しつつある。この経験価値の共有が観光旅行の本質であり、持続可能な社会に近づくライフスタイルへとリデザインするきっかけになるのではないだろうか。

